

竹富島研究報告レジュメ

琉球大学 教育学部

2年次 金城琴美

1. テーマ：「竹富島の若者達 若者は祭へどう関わり、それは、どのように受け継がれていくのか」

* テーマ設定の理由

多くの島々には、その島の独特で固有の祭や文化が存在する。実際、竹富島にも、「結願祭」や「豊年祭」、「種子取祭」など22もの祭が今日までとり行われている。特に、「種子取祭」は、国の重要無形民族文化財に指定されるほどで、厳格にとり行われてきた。また、島人にとっても種子取祭は特別な祭事であり、島人の誇りにもなっている。しかし、今日まで、それらを存続させるにあたって、過疎での若者減少に直面していたことも事実である。実際、竹富島のために若者と祭の関わりについて、これからの将来を担う子どもたちに伝えていくことが大事だと思った。よって、祭と若者の関わりに重点を置きたいと思う。

2. 島での調査事項や方法と調査結果

* 20代～40歳までの若者に、アンケート調査(島内・島外出身者)

調査人数：20名

男性：12名

女性：8名

島内出身者：7人

島外出身者：13名

(以下、島内、島外というふうに略)

祭に参加したことがありますか。

島内...ある：6人 ない：1人

島外...ある：9人 ない：4人

ある人は、何歳ごろから祭りに参加しましたか。

島内...2歳、幼いころから、小学生、中学生(12歳) 2人、39歳

島外...21歳、22歳、25歳(2人)、28歳、29歳、30歳、32歳、

あなたは芸能(例えば、踊りや音楽など)をしたことがありますか。

島内...ある：6人 ない：1人

島外...ある：9人 ない：4人

である人は、それは、何歳ごろから、誰に教わりましたか。

島内...中学生(11、12歳)、32歳

村の人、島の人、師匠、先輩、芸能保存会の方々

島外...23歳、25、6歳、28歳、子ども 集落ごとの師匠など

祭に参加すると、どのような気持ちになりますか。また、その魅力は何ですか。

【島内】

- ◇ 感無量、終わった後の気持ち
- ◇ 楽しいし、頑張っていこうと思う。島の誇りだと思う。
- ◇ 神様に奉納する踊り等であるので、真の気持ちになります。
- ◇ 地元の義務であり、使命。
- ◇ 歌・踊り・音楽など島の原点をやっているんだな、という気持ち。

【島外】

興奮する / 複雑、難しい / 楽しい / ストレス解消 / 嬉しい / 厳粛な感じ / 感動する / 参加した人間同士が、一つになれた気がする

あなたは、将来、祭を受け継いでいきたいですか。

島内...はい：6人

島外...はい：6人 いいえ：3人

祭で楽しいことや面白いことは何ですか。

【島内】

- ◇ みんなでまとまって練習すること
- ◇ 全部

【島外】

- ◇ 仲良くなる、一つになる、島という人数が少ない中での機能
- ◇ 全部合わさって
- ◇ 島民のすべてが協力しあい、一つになれたように思う。
- ◇ 唄三線が出来ること。感動すること。
- ◇ 祭を通しての人との一体感

「(島の祭)」と聞いて、どのようなことが思い浮かびますか。(選択)

【島内】

楽しい(2) / 面白い(2) / 名誉だ(1) / 開放的(1) / 独自性(1) / まとまりのある(1) / 生きがい(2) / 誇り(4) / 熱い(1) / 厳粛(1) / 大変(1) / 真剣(1) / 神様(3) / 緊張する(2) / やるべきこと(1) / 難しい(1) / 本格的だ(1)

【島外】

楽しい(7) / 面白い(7) / つまらない(1) / 名誉だ(3) / 明るい(1) / 閉鎖的(1) / 独自性(2) / まとまりのある(5) / 生きがい(2) / 誇り(4) / 熱い(4) / 厳粛(3) / かわいい(2) / 疲れる(3) / 大変(8) / 真剣(6) / 神様(7) / 緊張する(4) / やるべきこと(4) / 出たい(5) / 難しい(5) / 本格的だ(4)

あなたにとって、島の祭はどのような存在ですか。

【島内】

- 島を守る大切な物 / 600年の歴史 / 大事なもの / 神秘的 / 島で住むために、やらねばならない仕事

【島外】

- 生きている実感 / 島の宝 / 参加し難い厳粛なもの / 生活の一部 / うっとうしい
- 祭事を「見る」だけなので、自分の中で『存在』としてはない / とても大変な行事
- その季節になくってはならない大事なもの
- 仕事よりも優先される厳粛なもの
- これからも守っていくべきだと思う
- 竹富島そのもの（竹富島は祭りで成り立っているし、祭りも竹富島で成り立っていると思う）
- 島で生活していくうえで、欠かせないもの。大切なもの
- 日常の延長であり、日常の集大成。それと同時に、非日常的な存在。両方のすごいバランス感覚で成り立っている。

あなたは今後、島の祭りはどうあるべきだと思いますか。また、あなた自身、祭りに対して、こうしていきたいという意思はありますか。

【島内】

- 後継者を育てる / 昔から伝えられている物を、そのまま守っていく
- ショー的であってはならない、祭り本来の儀式としての姿を守る

【島外】

- 今後、主事などの役職を若者が担っていかなければならない
- 今、島を出ている青年達が戻ってきて、祭りを受け継いでいくべし
- たくさんの人に見てもらいたいけど、観光化しない方がよい
- 魅力のある大事業だが、人数が減っている今となっては、やり方を少し考える必要があると思う
- 自分は受け継ぐ意思はないが、島外からの人間にも継承していいものではないかと考える
- 昔からの形のまま、長く守って伝えていくべきだと思う
- 祭りはなくてはならないことだと思うので、きちんと受け継ぐべきだと思う。積極的に参加し、学んでいきたいと思います。
- それぞれが、自分にできることで協力していく。私も、その時その時できることを精一杯協力したいと思います。現時点では、踊りなど。
- 祭りの数を減らした方がいい
- 島人がここで、どんどん祭事などを受け継ぎ、生きていくことが望ましいが、島外に出て行く中で、島人にはジレンマがあると思う。また、国指定重要無形民族文化財という名のもとで、祭りが外部で踊らされている部分があるが、祭りそのものの素晴らしさを見つめ、知ることが大切ではないか。竹富島は、学者の研究対象となることが多いが、彼らの発言力により祭りや島が持ち上げられ、本来の形ではなくなる危険性がある。分別を持って、島のことを理解してもらいたい。

- 「祭り」ではなく「政（まつりごと）」または「奉り」として、本来あるべき姿で神々しくあってほしいと思う。「保存」「持続」「継承」していくのは言うほど易しくない。自分としては参加したいし、関わりたいと思っているが、やはり、外部者は立ち入るべきではないのだろう。ならば、外部の者ができる範囲で、別の角度から、この島を支えていくことはできないのだろうか...と常々思っているが、まだ私自身その答えが見つかっていない。

島内・島外を問わず、竹富島には非常にさまざまな出身者が存在する。そのような中で、祭りは彼らを繋ぐ。祭りに対する思いは、本当にさまざまだ。

島の祭りに対する今後のあり方について、多かったのが、島外に出ている若者を含めて、島の若者が積極的に今後、芸能を継承して行ってほしいということだった。

* 同じような質問を、竹富小中学校の子どもたちに行なった。

調査人数：6名 男：2名 女：4名

祭りに参加したことはありますか。 ある：全員

ある人は、何歳頃から祭りに参加しましたか。...2歳、10歳、13歳、14歳

あなたは、芸能（例えば、踊りや音楽など）をしたことがありますか。 ある：全員

である人は、何歳頃から、誰に教わりましたか。

7歳、8歳、10歳、13歳 島の師匠、母親

祭りに参加すると、どのような気持ちになりますか。

めんどろ／緊張する／疲れる／楽しい／1年中祭りが楽しみ

あなたは、将来、祭りを受け継いでいきたいですか。 はい：3名 いいえ：3名

祭りで楽しいことや面白いことは何ですか。

夜、みんなで集まったりすること／ユークイ／他の人の踊りを見ること／人がいっぱい来る／踊れること

「(島の)祭り」と聞いて、どのようなことが思い浮かびますか。(選択)

楽しい(4)／面白い(3)／つまらない(1)／明るい(3)／開放的(1)

独自性(1)／生きがい(1)／熱い(1)／疲れる(2)／神様(2)／

緊張する(2)／本格的だ(1)

島の祭りに対する、子どもたちの思いは、年代ごとに変化を見せている。1940年代から1960年代前半にかけて、子どもたちにとって祭りは出たいものであり、成人してからは、出るのが当たり前のものだった。1970年代になると、全員が祭りに出られるようになったが、それでも子どもたちにとっては嬉しいものだった。

今回、子どもたちに聞き取り調査を行なってみると、「祭りは面倒」と言う子どもたちもいたが、祭りと聞いただけで、楽しそうに話してくれる子どもたちもいた。

竹富島の子どもたちは、幼いころから地域の人々との関わりが強く、祭りや伝統芸能な

どを通じて共同体意識を共有していく。その中で、互いに相手を思いやり、協同していく心を育む。島人が大切にしている「うつぐみの心」はそのような日常生活の中で、体現される。

互いに協力し合い、さまざまなものを作り出し、島の生活に根ざした文化や歴史を学ぶことで、将来、竹富島の未来を切り開き、祭りや芸能などを受け継いでいこう。

竹富島の若者と祭りの関わりということで、上のようなアンケートの他、祭りに関わる方々から様々な立場の意見をうかがいました。

【青年会長】...青年会には島に住む若者が多く存在するということで、意見を伺ってみました。

- 青年会は、どのくらいの年齢層の方々がいますか。

現在、青年会にいるのは、21歳から35歳まで。しかし、島のために何か頑張っていきたいと思う人なら、どの年齢でもはいてほしいと思う。

- 青年会の中で、本土者が半数以上を占めているということですが、そのことについてどう思いますか。

青年会に入る人で、気持ちがある人、島のためにできる人であるなら、いいことだと思う。

- 今日の、青年会の取り組みはどうですか。また、定期的な集まりや取り組みはあるのですか。

会の会場作りや、祭りの準備、エイサー、小・中学生や本土の人を受け入れるためのバレー大会など、島のためになることに取り組んでいるので良いと思う。会費などは、ボランティアをすることで貯めている。月に三分の一は、集まりをもっている。

- 青年会で、様々な取り組みを若者に伝える上で難しい点、問題点はありますか。

本土の人と島人の考え方や意識の違いではないか。本土の人には、うつぐみの心が根付いていない。逆に、島人は、島の周りの人々に何かあると気になってしまうところがある。青年会などの取り組みを通して、わかってくるんじゃないか。

- 島の若者に対して望むことはありますか。

楽しい島の住み方を身に付けて、島のみんなで頑張っていこう。

- 島人が大切にしている「うつぐみの心」は、今日、生活の場のどこで育まれていっていると思いますか。

行事があるとき、協力し合う上で。青年会長が今後の青年会のあり方について、強く望んでいたことは、「学校の教員の中に青年会に入る人がいれば、教師が子供たちと青年会のパイプ役となり、もっと、地域に根ざした子どもづくりができるのではないか」ということでした。今後の青年会の取り組みを活発にすることで、島と若者の関わりはより良くなるのではないかと思います。

【感じたこと】

実際に、若者の祭りへの意識を調査するにあたって、テーマが「祭り」というだけに、ものすごく難しかったです。祭りが多くの意味や歴史を含み、住民の意識の中に強く存在していることが、今回の調査で分かりました。竹富島で育まれた祭りや人々の心を、これから担う子どもたちに、いかに伝えていくかということが重要なことだと思いました。